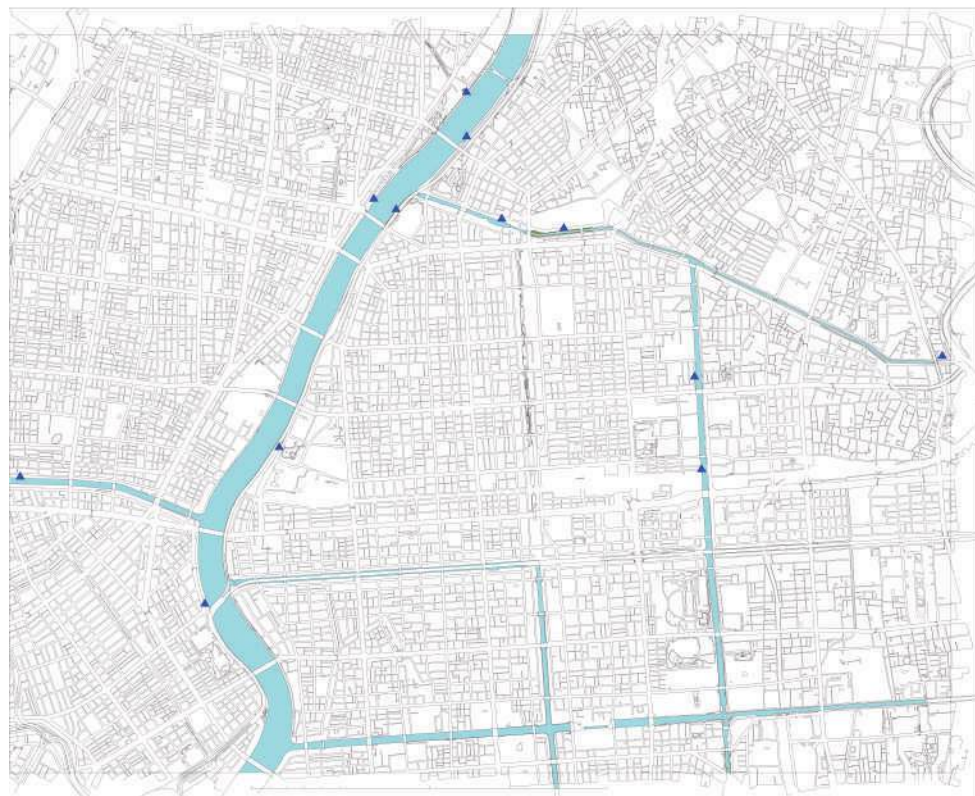




対象地域：北十間川・横十間川

北十間川

明暦の大火後の本所開発の一環として開削された。
当初は農業用水路としての北十間川(1663年)と輸送路としての源森川(1658年)が繋がっていたが、洪水被害の原因となったため1672年に分断された。(図①)

横十間川

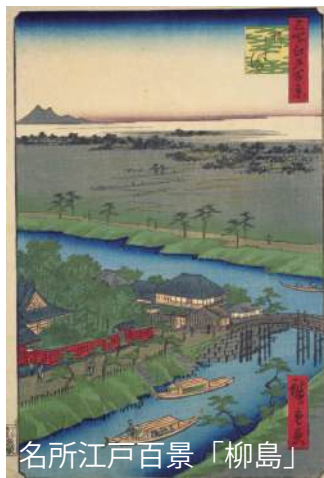
北十間川と同様明暦の大火後の本所開発の一環として1659年に開削された。

二つの川の結節点は名所江戸百景にも描かれるなど当時の人々に親しまれた川だった。

名所江戸百景「柳島」(出典：https://www.harashobo.com/ukiyo/ukiyo_detail.php?print_id=28171)
江戸切絵図「本所」(出典：<https://tokyo-trip.org/spot/visiting/tk0660/>)



現在の「柳島」

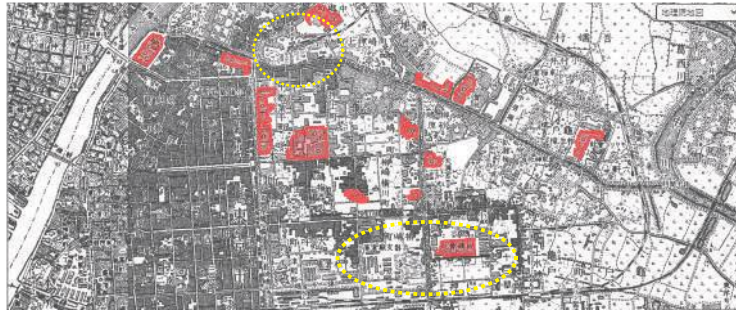


名所江戸百景「柳島」



江戸切絵図「本所」

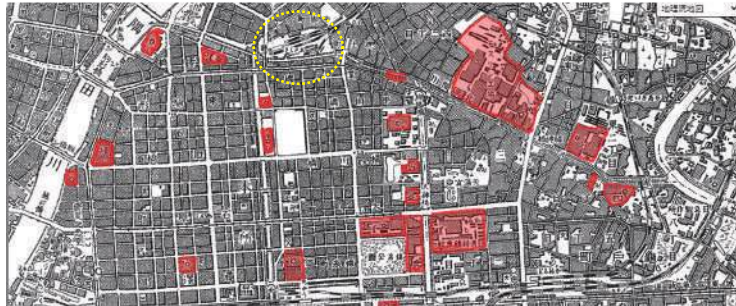
歴史的背景



明治

1885年(明治18年)に北十間川と源森川を分断していた堤が取り壊され、両川が接続される。また、それぞれの川沿いに工場が立ち並んでおり工業化の波が伺える。横十間川と大横川の間には「兵器支廠倉庫」「林倉庫」が確認できる。

吾妻橋駅は1904年に一時廃業となるも、1908年に貨物駅として、1910年には旅客駅として「浅草駅」に改称し営業を再開した。



昭和(戦前)

北十間川沿いのモスリン工場が大規模なものになる。一方で兵器支廠倉庫は錦糸公園となっている。



昭和(戦後)

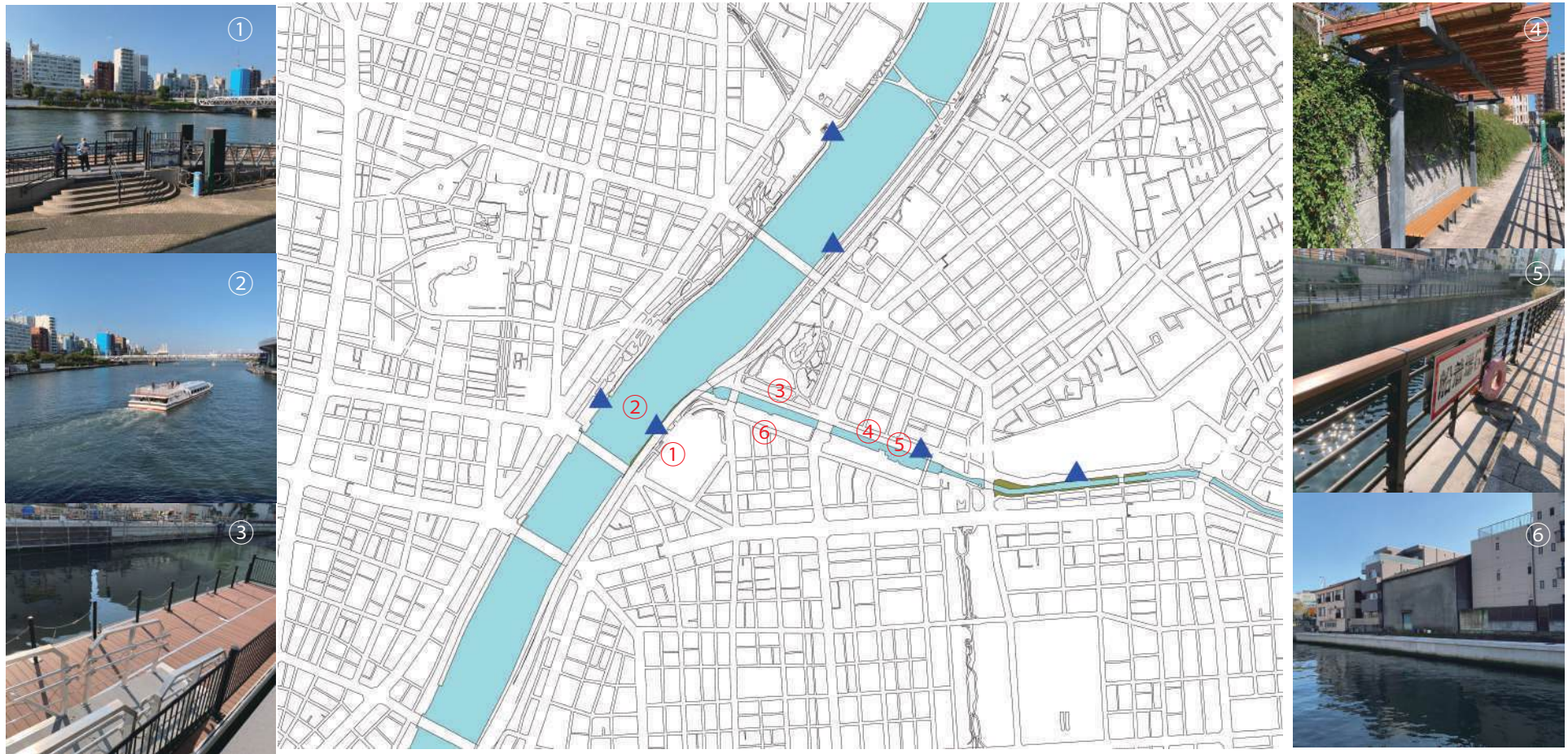
水運としての需要が縮小していき工場も数を減らしていく。1978年には北十間川と大横川の間北十間川樋門が設置され、川が再び東西に分断される。



平成

工場はさらに減少し、モスリン工場跡地が団地となる。また、大横川は周囲への浸水の危険を鑑みて常時排水する形となり、川幅も大きく縮小した。

現地調査

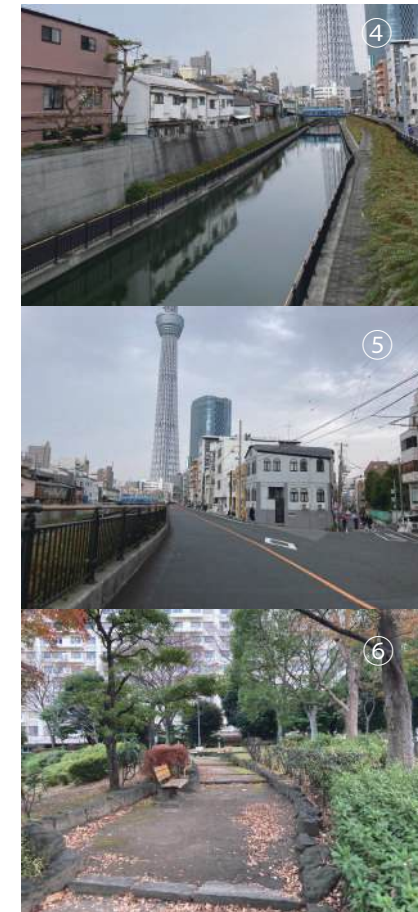
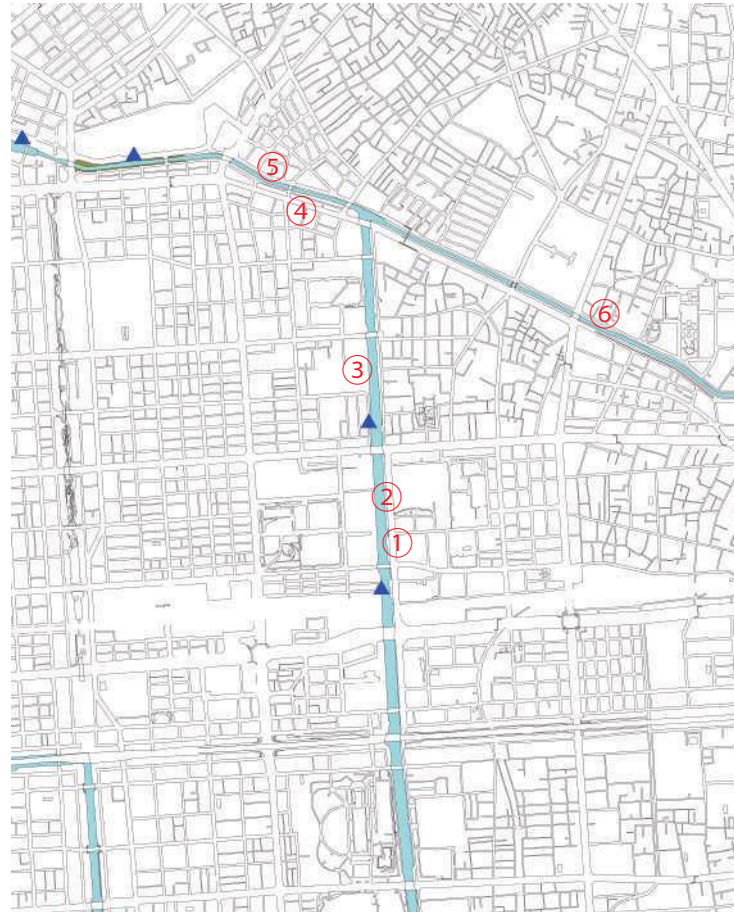


隅田川：船の往来が多く、それに伴って船着場も大規模で整備されたものが大半だった。

東京ミズマチ周辺：川に開けた店舗が多いが、ミズマチの対岸に目を向けると水辺に背を向けるようにして立ち並ぶ建物が目立つ。また、船着場は整備されているものの利用は月に数回のイベント時のみだった。

スカイツリー周辺：遊歩道が整備されているが人影は少なく、隅田川沿岸やミズマチ周辺に比べると水辺が孤立した印象を受ける。船着場も専用に整備されたものではなく柵が開閉できるだけの簡素なものだった。

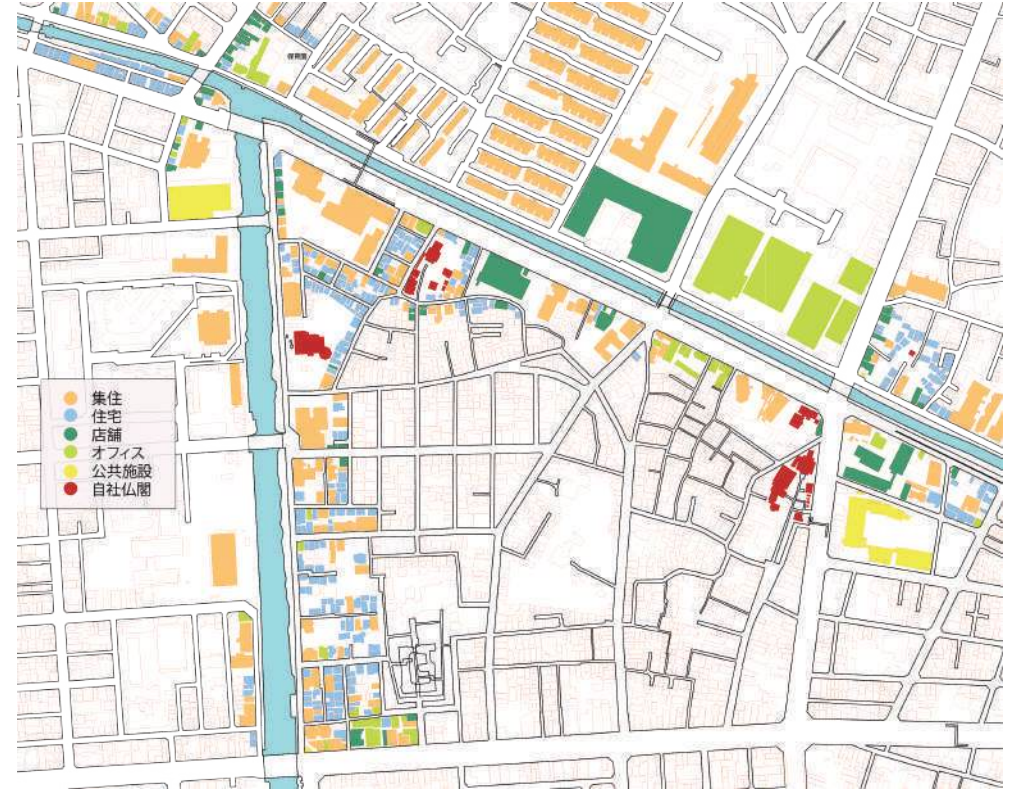
現地調査



横十間川：川の両岸に堤防が築かれているため、周囲を歩いていても水辺を意識することはない。
堤防の内側に簡素な遊歩道が設けられているが利用者は見られなかった。

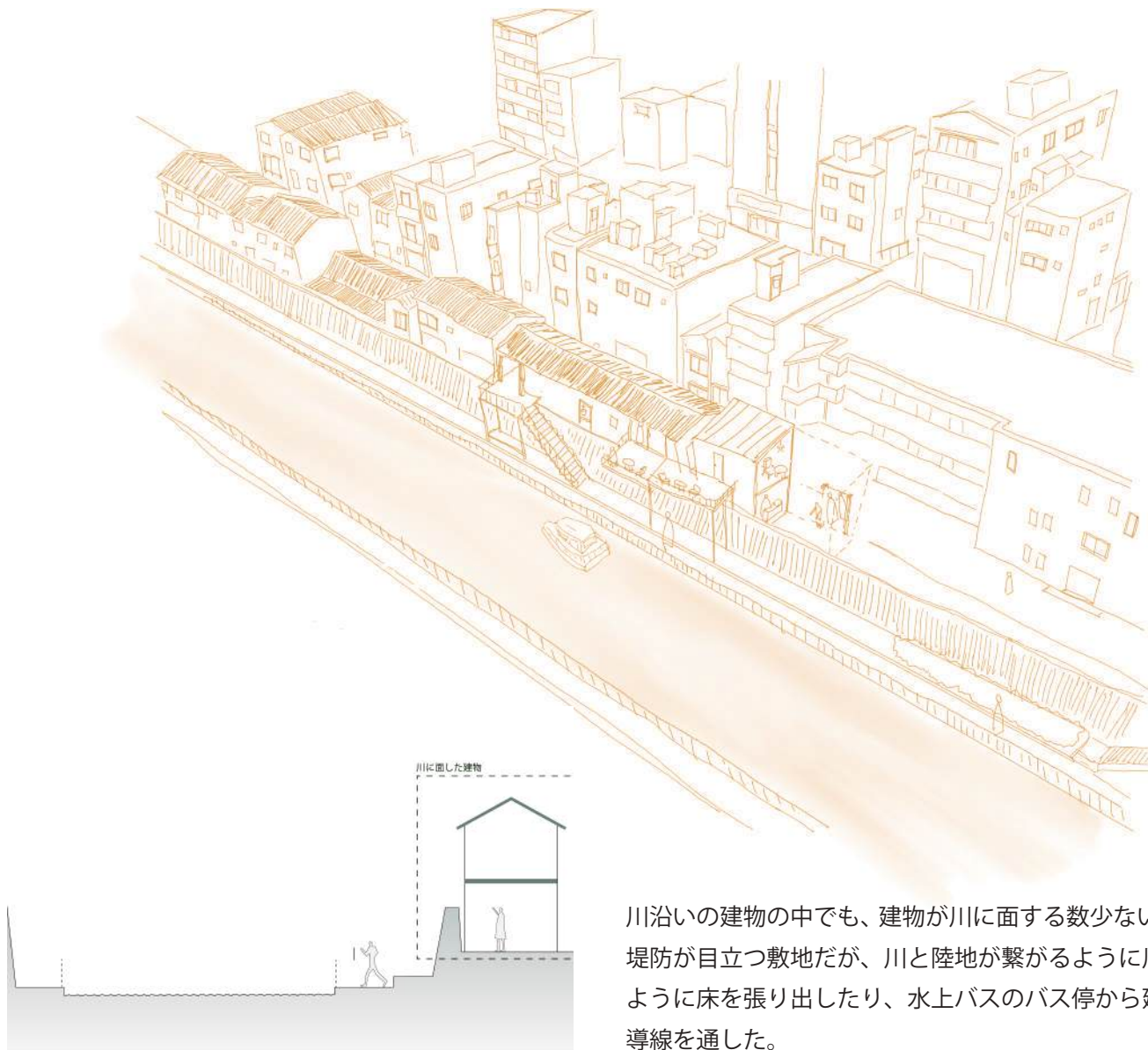
北十間川：一部に堤防が築かれているものの、視界に川が入る場所が大半で横十間川と比べると開けた印象を持つ。
公園に川を望むベンチが設置してある、川沿いの過程が私物を立てかけるなど地域住民も少なからず川を意識していることが確認できた。

計画



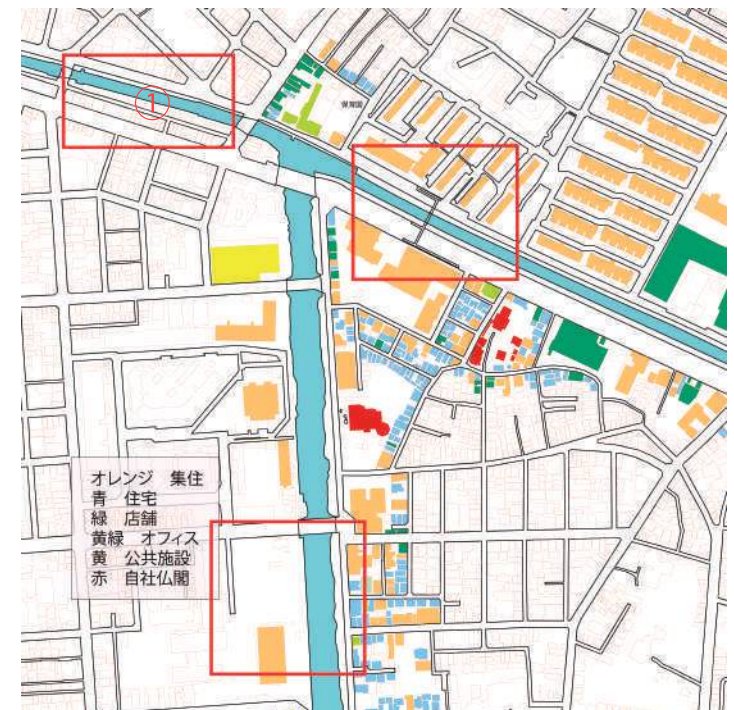
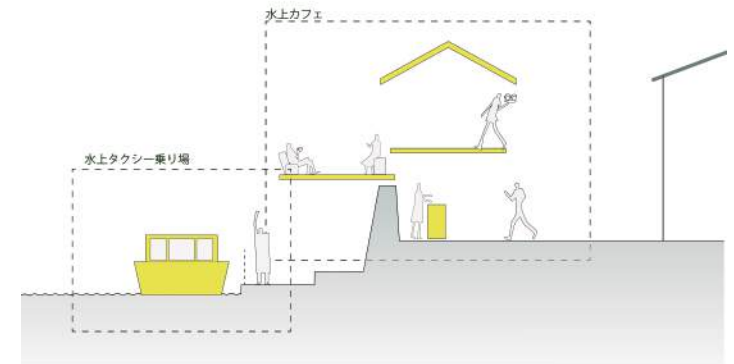
船着場を計画する場所として、公共交通網の薄い場所を見つけそこに航路を通そうと考えた。
JR・私鉄の各路線と駅をプロットした結果北十間川と横十間川の結節点付近を計画のエリアとした。
また、計画エリアの用途を調査したところ、川沿いには一般住宅・集合住宅が多くみられたため地域住人に利用されやすい船着場を目指すこととした。

敷地 1 - 倉庫 -

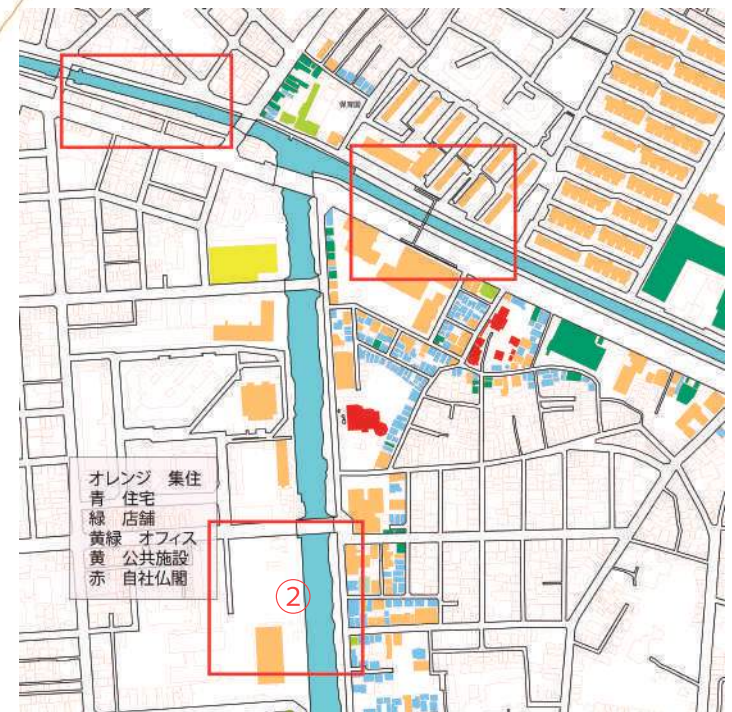
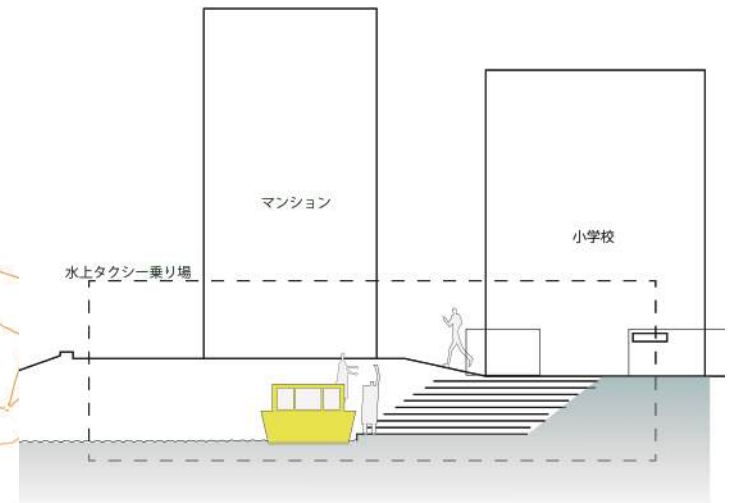
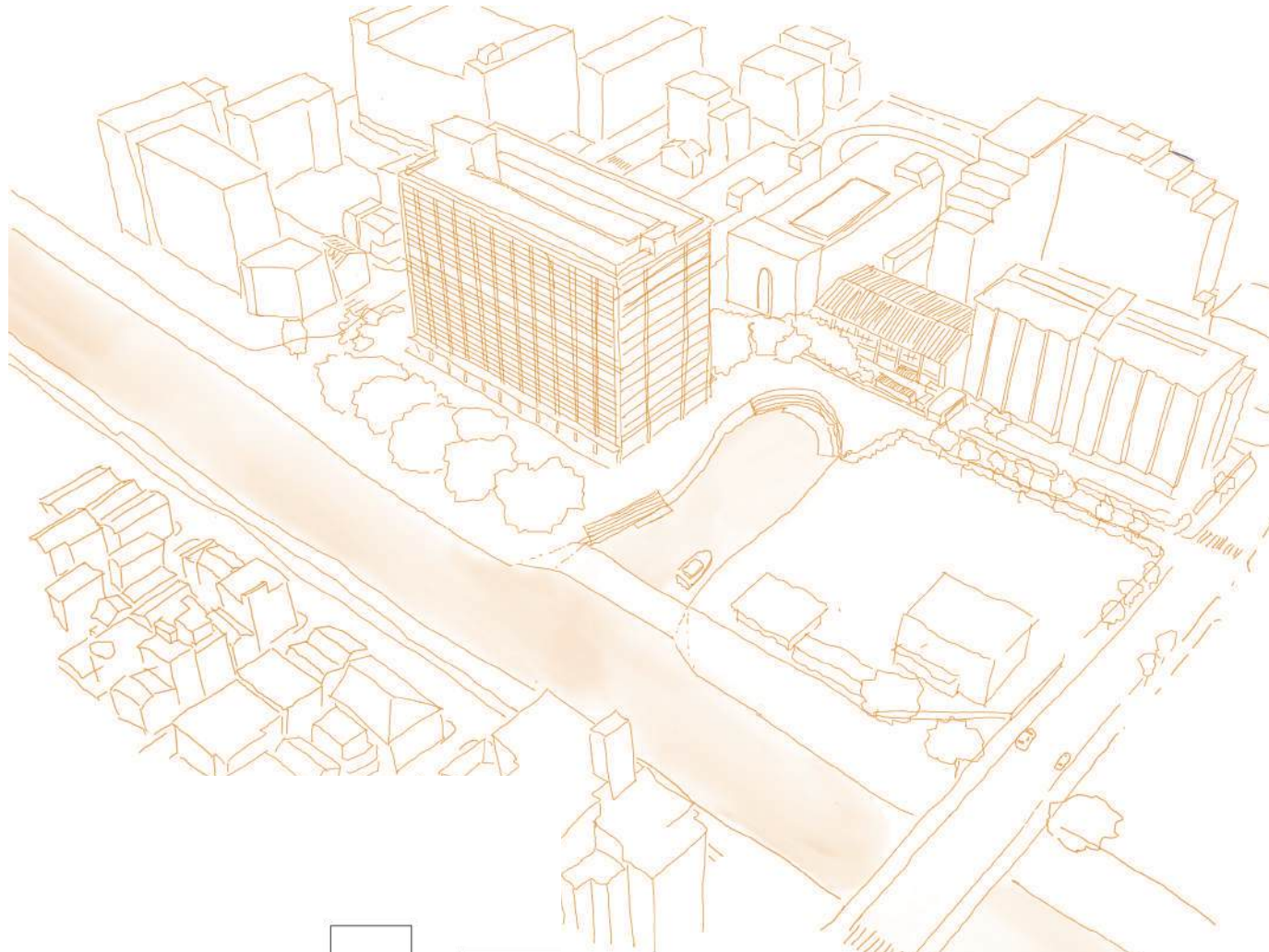


現状

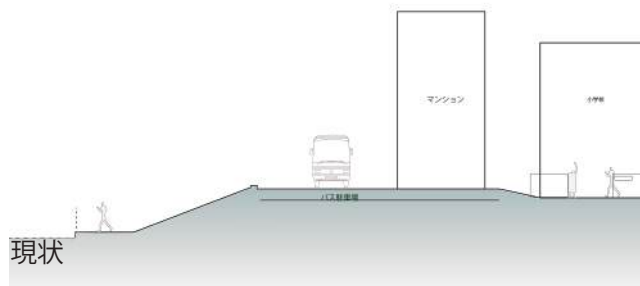
川沿いの建物の中でも、建物が川に面する数少ない敷地。堤防が目立つ敷地だが、川と陸地が繋がるように川床のように床を張り出したり、水上バスのバス停から建物に導線を通した。



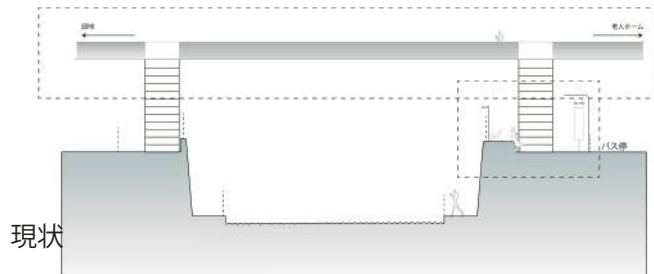
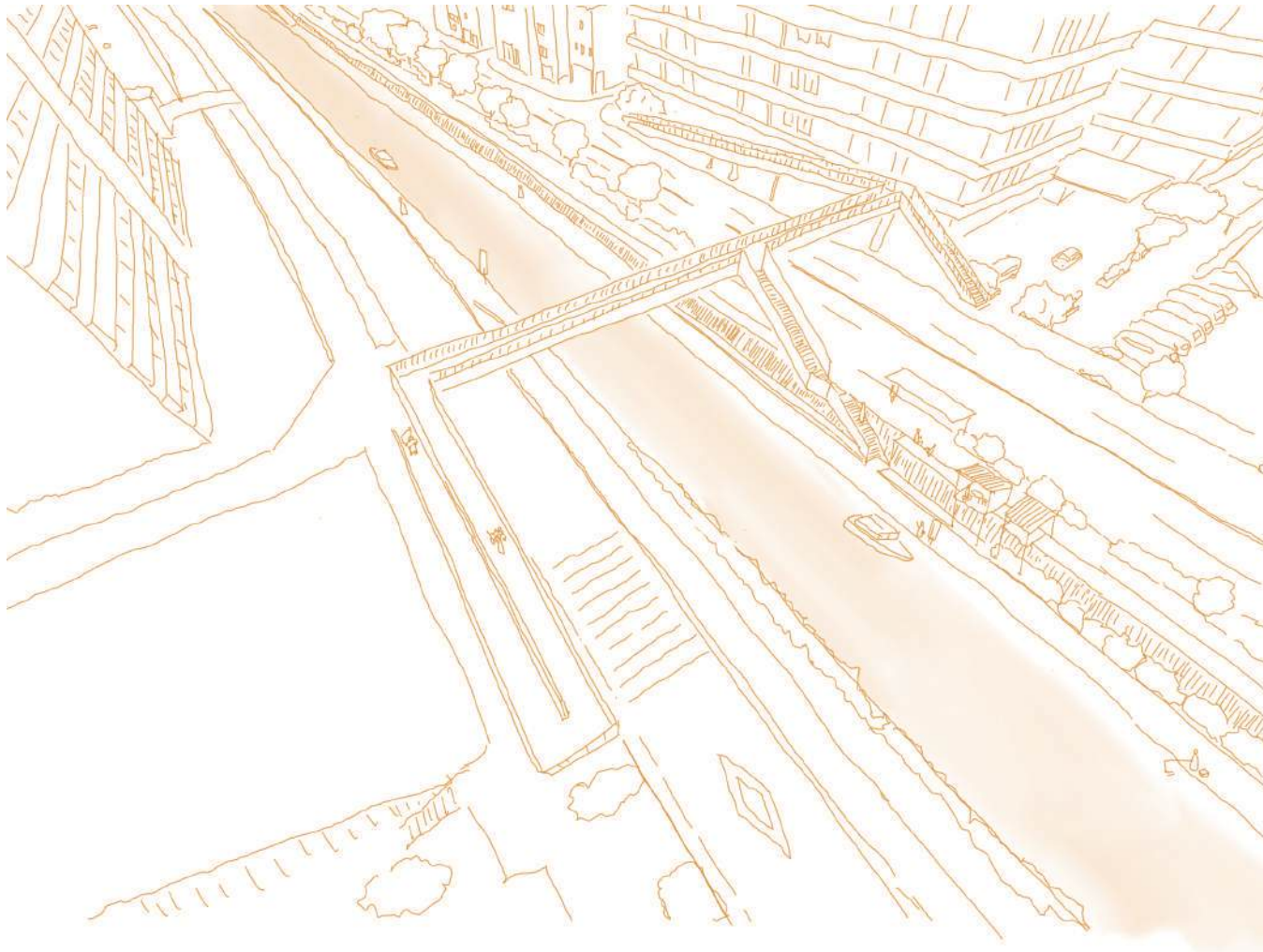
敷地2 - マンション -



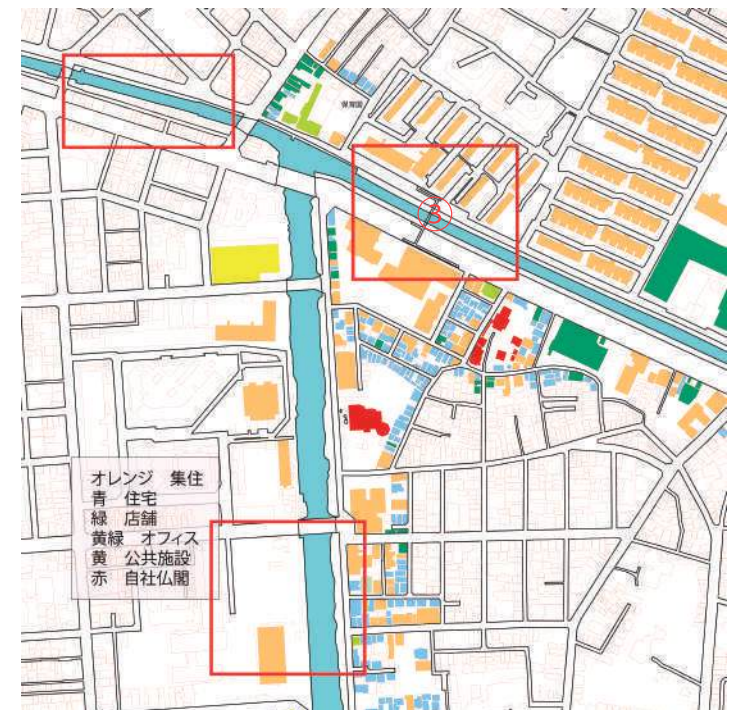
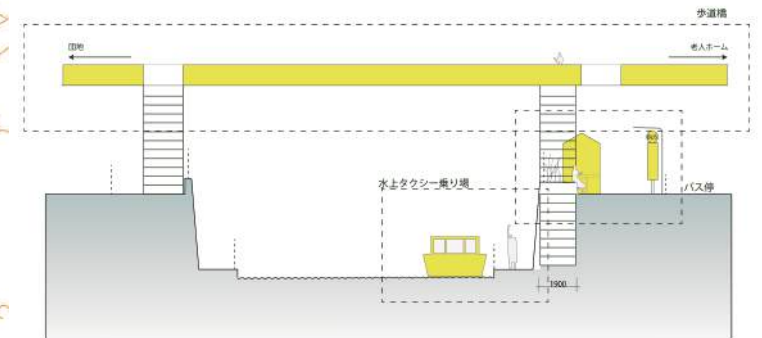
マンションと小学校とバスの駐車場の境界に入江を作る。
マンションの住人、小学校の生徒・保護者が会話したり川に降りる階段で休憩したりできる集水上バスのバス停を計画した。



敷地3 - 歩道橋 -



団地と老人ホーム、バス停を繋ぐ歩道橋が川を跨いでいる。バス停に降りる階段を堤防を削って作り直し、さらに水上バスのバス停をつなぎ直す。また堤防の段差に仮設の部材をはめ込んでアクティビティをうむきっかけとして堤防を考えた。



橋詰広場を利用した水辺空間の計画

21N1134 長岡杏佳

21N1147 山田日菜子

橋詰広場の歴史

1. 橋のたもとに三角形や台形の公園や広場が設けられていることが多く、このようなスペースを一般的に「橋詰広場」と呼ぶ。

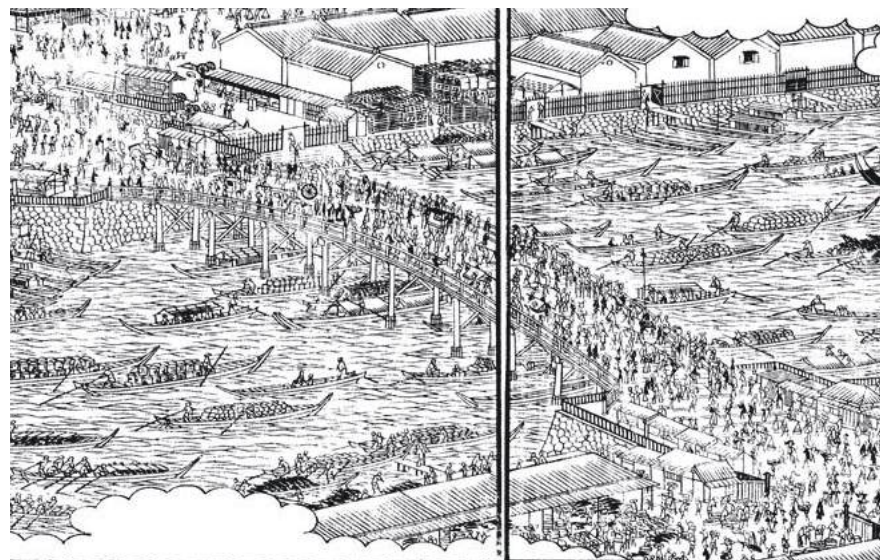
江戸時代以前は橋を架ける際に費用を節約するために道路よりも橋の部分を狭くしたので、両岸の橋のたもとに空きスペースができて、橋詰広場と呼ばれた。



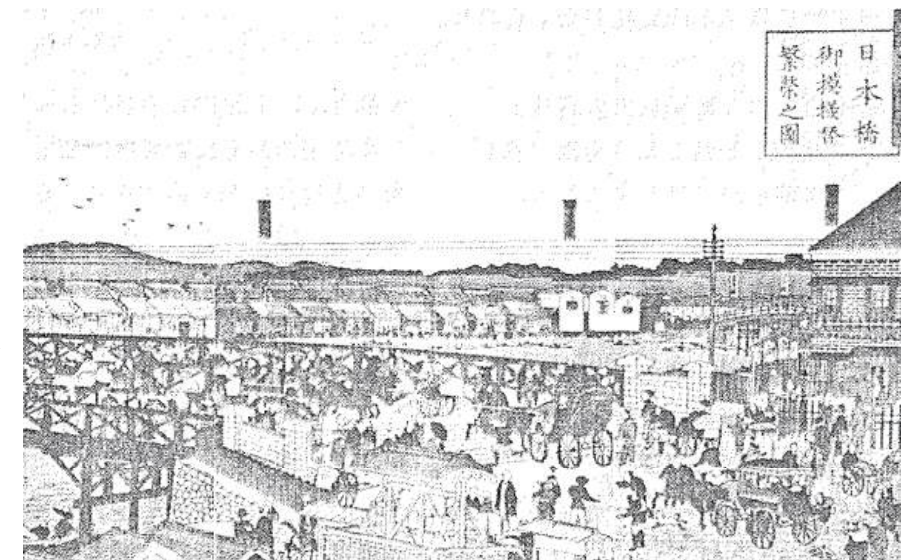
2. 江戸時代初期に製作された『江戸図屏風』には日本橋周辺の風景に橋詰広場が描かれていて、大勢の人が行き交い娯楽を楽しむ場であったことが読み取れる。また、当時は木橋だったので、火災による延焼を防ぐために、橋詰広場が火除地としての役割も果たしていた。



3. さらに、江戸時代後期に製作された『江戸名所図会』をみると橋詰広場には茶屋や露店も並んでいて、江戸の街の発展とともに利用形態も進化していたことがわかる。



4. 明治期になると橋詰広場に電信局や公衆電話が設置され、「情報センター」としての機能がより高度化された。その反面、床見世などが設置できなくなり「娯楽センター」としての橋詰の機能が失われて、人々の賑わいも無くなった。



5. 大正期、関東大震災後の震災復興計画において、橋詰広場は計画的に設置されていた。柱架け替え時の仮橋敷地として利用し、平時は材料置き場・交番・便所などの敷地として利用するためだった。残りの敷地には植栽が施され、人の出入りは出来なくなった。

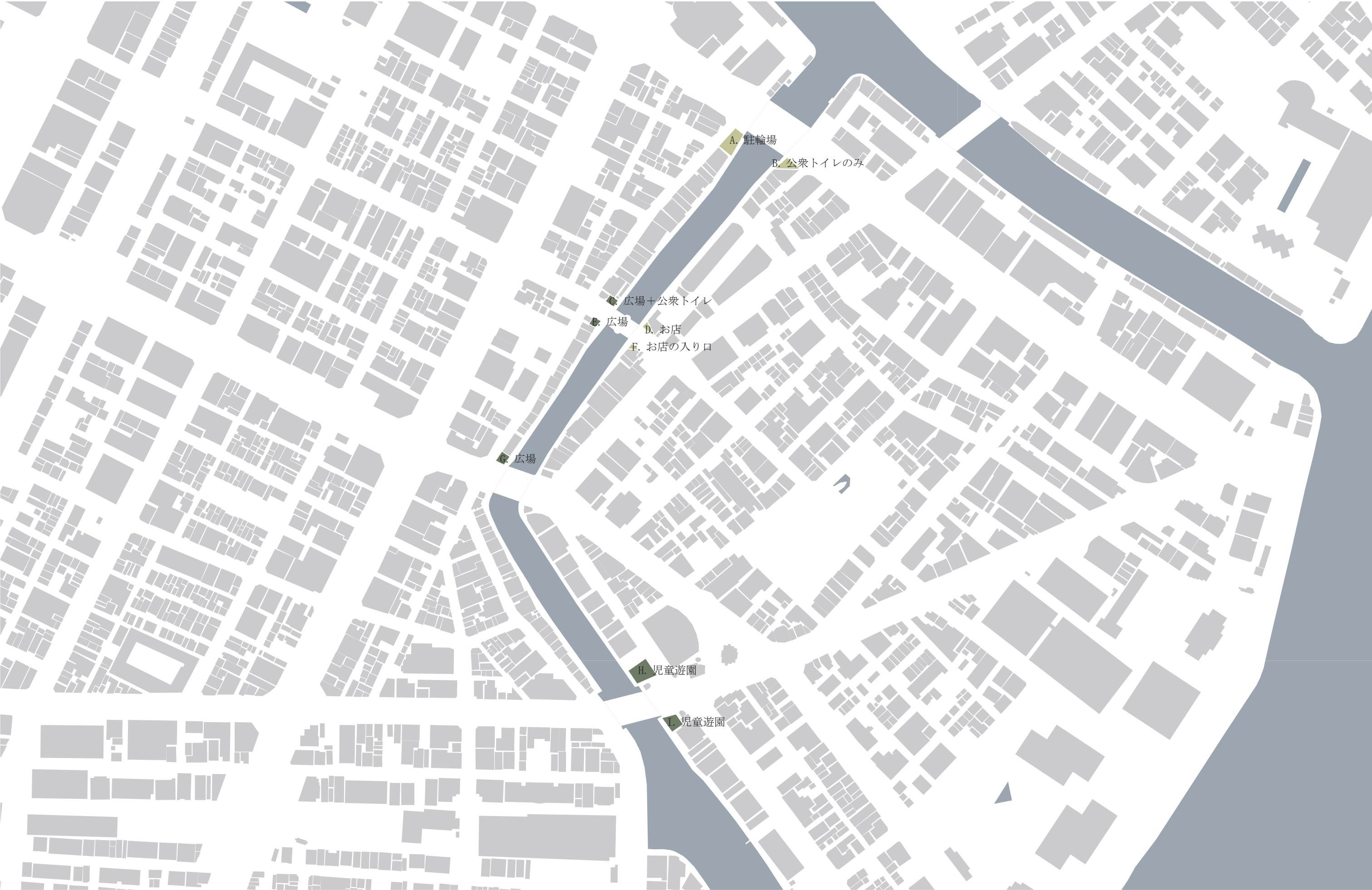


6. 昭和期、都市内に児童公園が作られるようになり、周辺に空き地がない場合は橋詰が適地として選ばれ、橋詰に児童公園が設置されるようになった。



最近まで橋詰は管理不備により不法占拠されたり、粗大ゴミの捨て場となったりして、周辺住民にとって迷惑な空間であったが、現在は都市景観を楽しんだり、休憩のためのスポットとして「ポケットパーク」が設けられるようになった。このように、時代と共に都市センター機能が一つ一つ分離されてしまったことによって、江戸時代にあった賑わいは消えてしまった。







A. 駐輪場



B. 公衆トイレのみ



C. 広場+公衆トイレ



D. お店



E. 広場



F. お店の入り口



G. 広場



H. 児童遊園



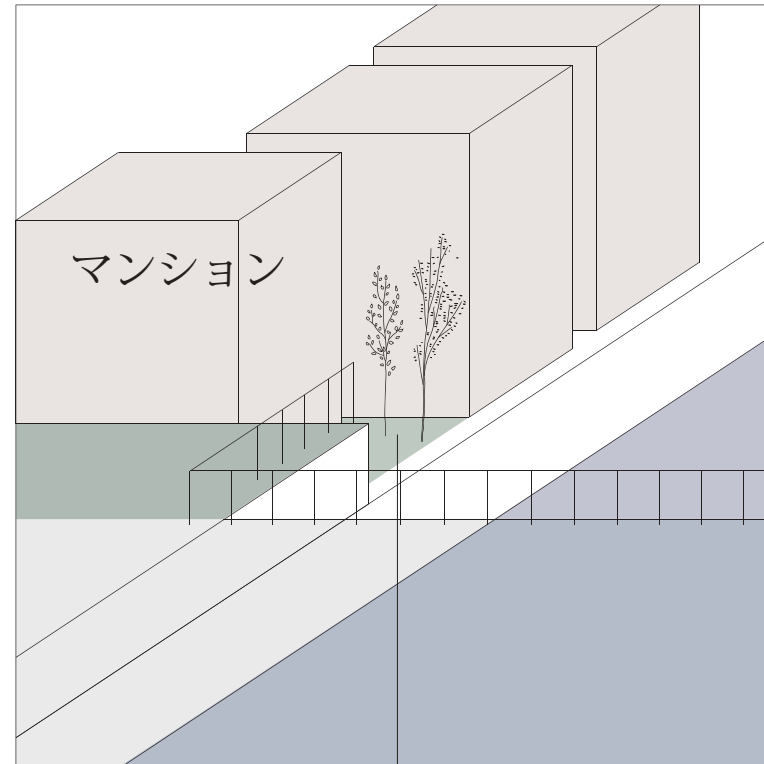
I. 児童遊園

昔のように賑わいの場となっている様子は見られない

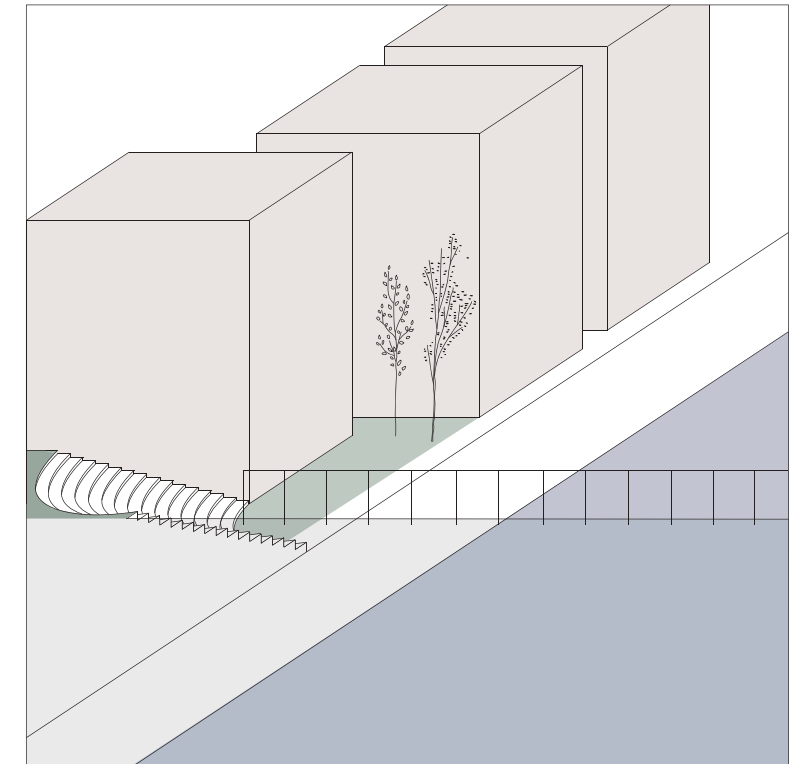
様々な用途や形態が存在する → 特徴を生かした様々な居場所をつくる



site1

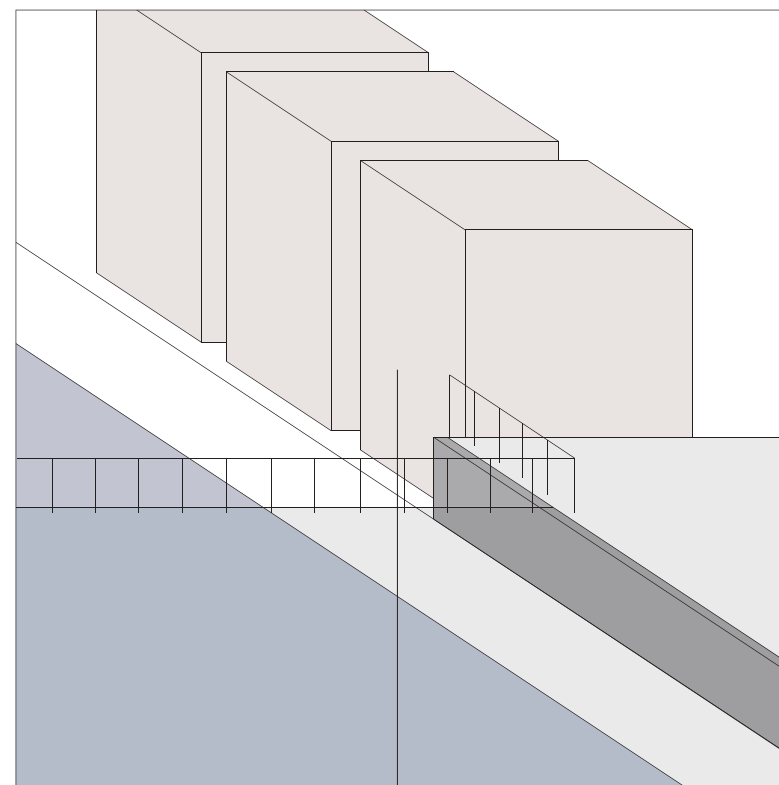


マンションの川側には
使われていない広場のようなもの

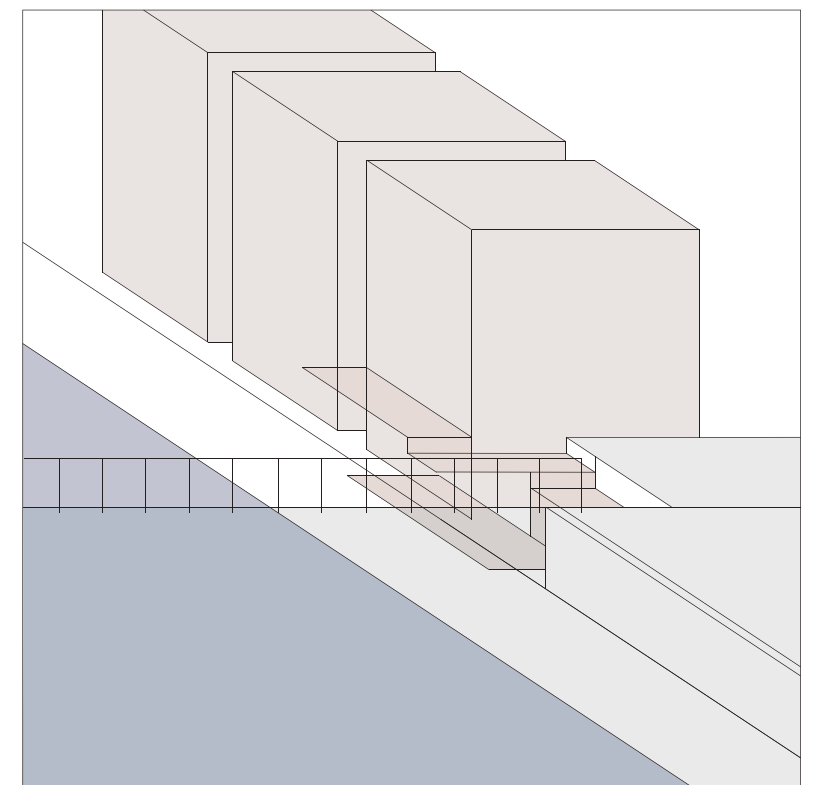


階段で二つの広場をつなげる

site2

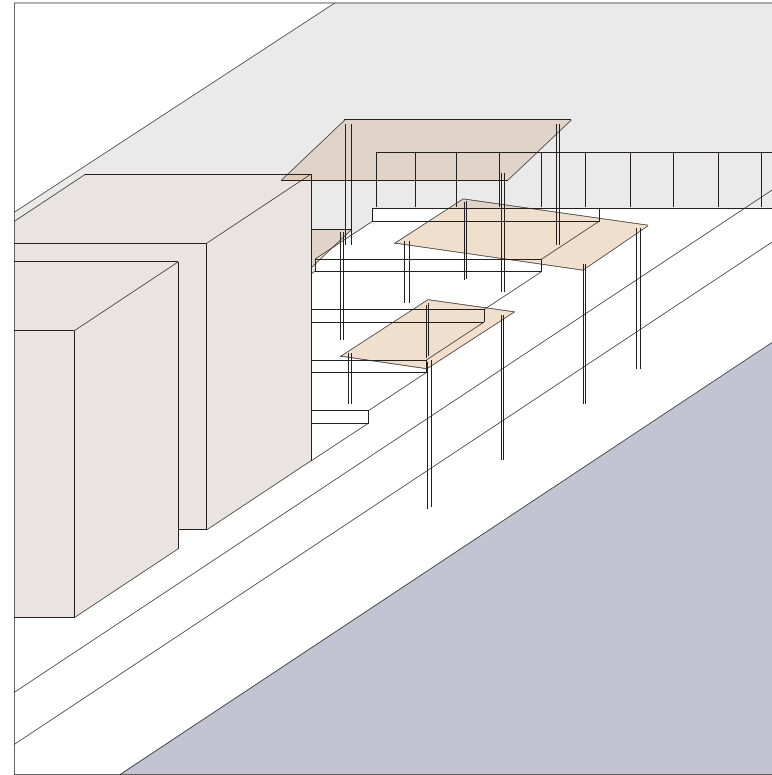
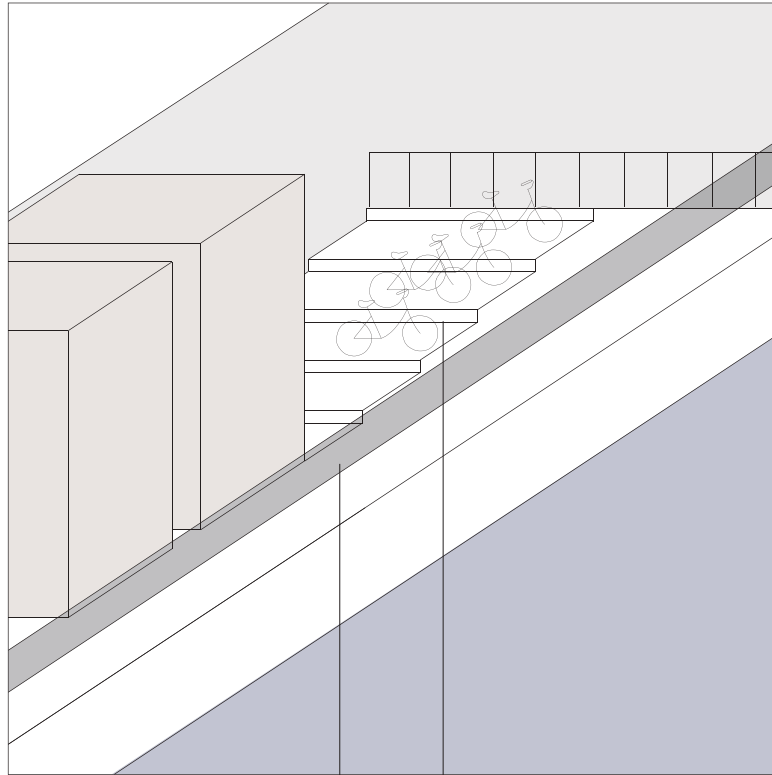


川にひらかれていない飲食店



水辺に降りる動線としても使われる
飲食店のテラスを設ける

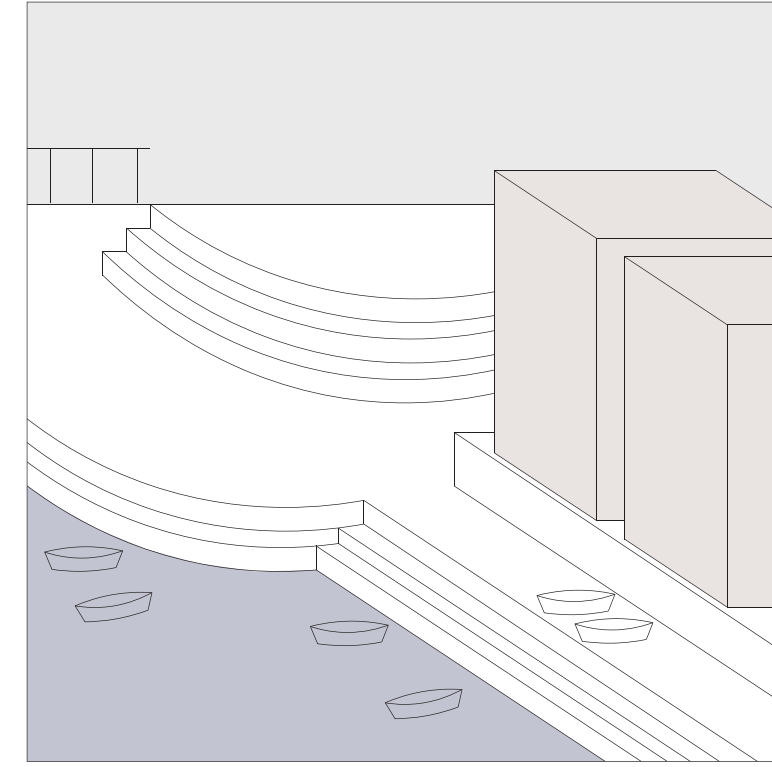
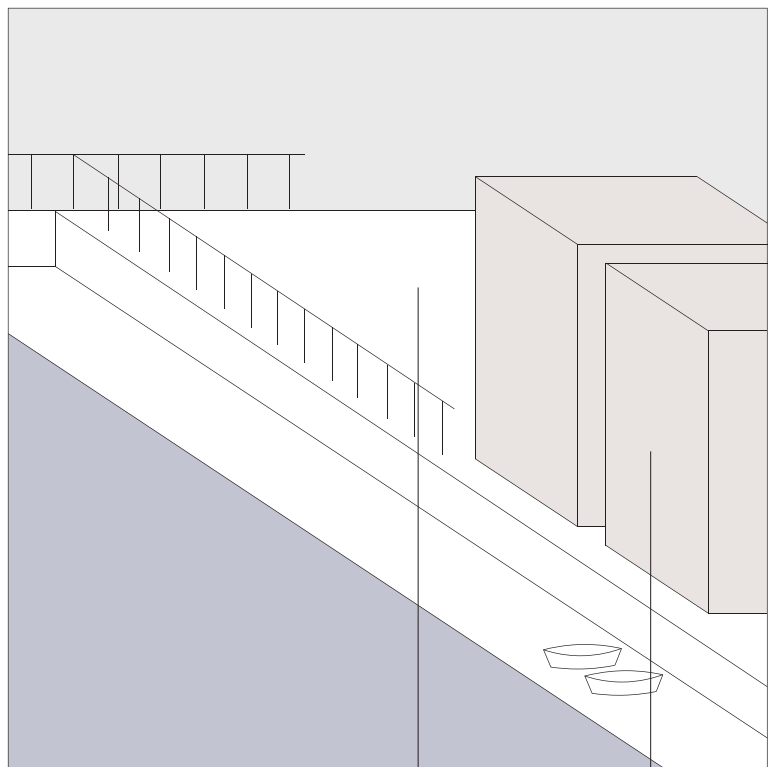
site3



斜面により段々になっている
塀により川へ降りられない

塀を取り払い、屋根をつけることで
人の居場所をつくり出す

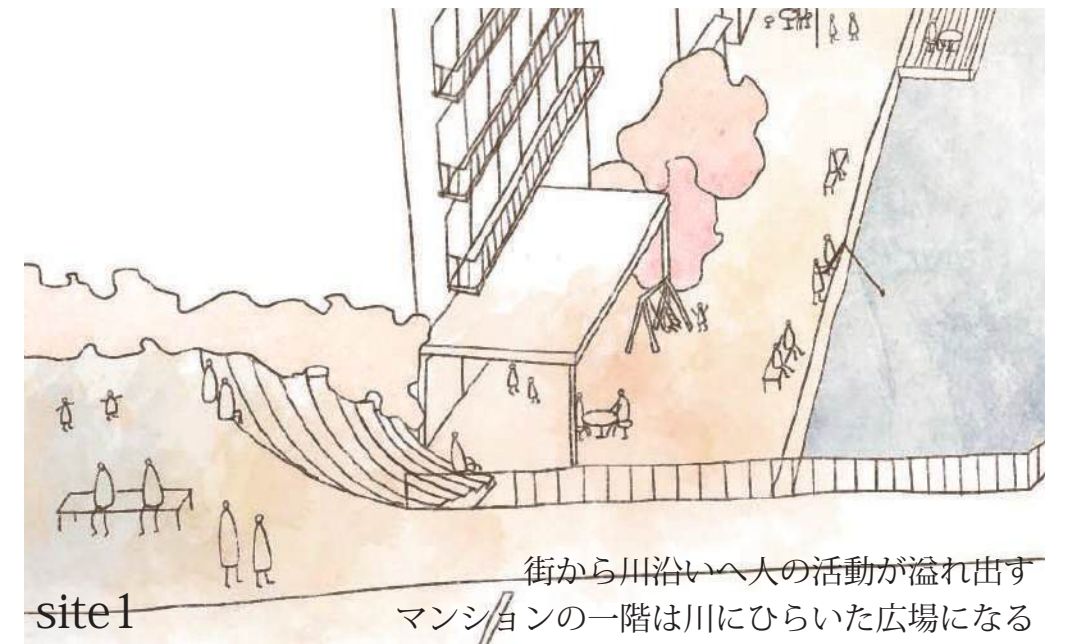
site4



塀により川へ降りられない

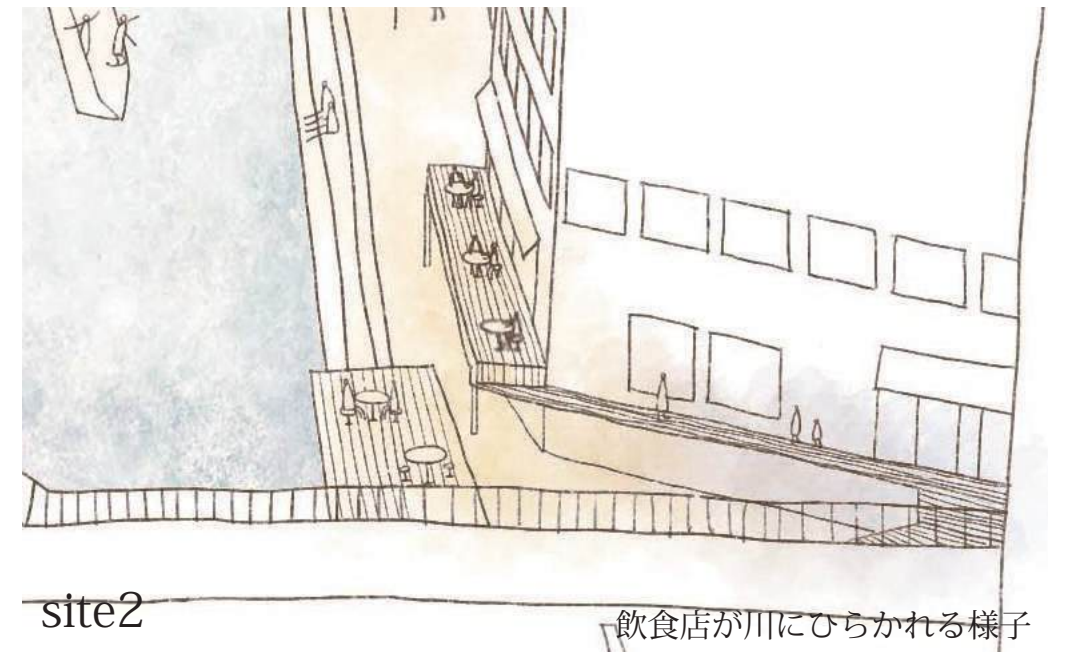
ボートを取り扱うお店

階段で道路と水辺をつなげる
船着場を設ける



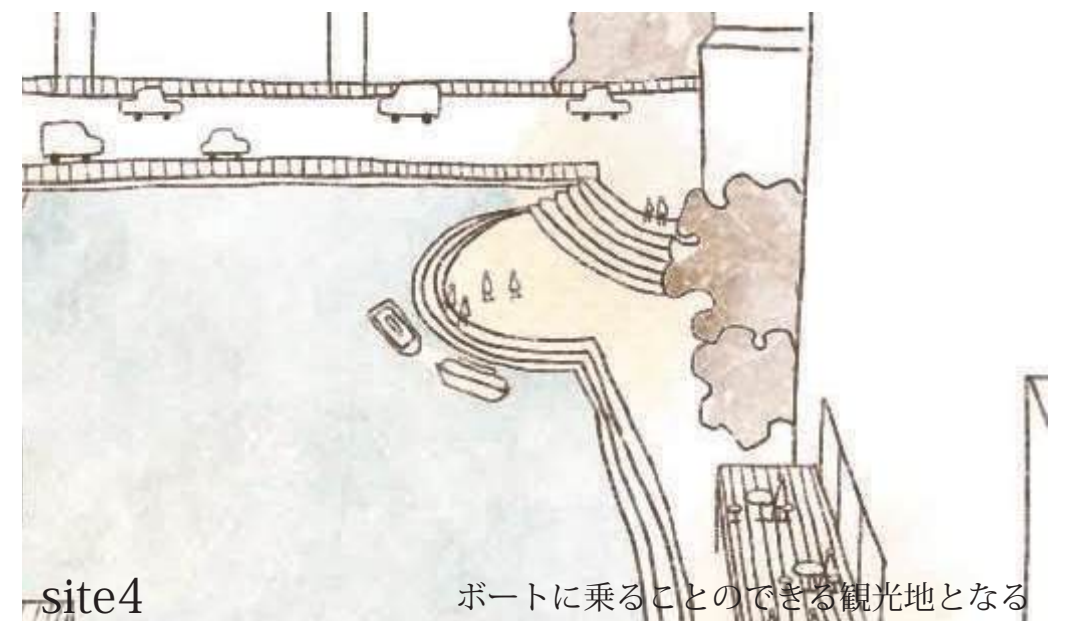
site1

街から川沿いへ人の活動が溢れ出す
マンションの一階は川にひらいた広場になる



site2

飲食店が川にひらかれる様子



site4

ボートに乗ることのできる観光地となる

